

## 似雲とその師武者小路実陰

——和歌観の師資相承を中心に——

秋 末 一 郎

本稿は、武者小路実陰の弟子として十二年の長きにわたって親しくその教えを受けて、世に「今西行」と謳われた似雲法師の和歌観が、師資相承のそれであることを考察したものである。まずは歌人としての似雲の生涯のあらましを述べ、ついで似雲・実陰兩人の在世当時の歌壇を概観することから入る。

似雲の生涯は、おおむね三期に分けることができる。第一期は郷里安芸国広島に在った時代で、寛文十三（一七三三）年の誕生から、宝永五（一七〇八）年十月に出家して翌六年の春、実陰の門人であつた香川梅月（宣阿）を頼って上京するまでの三十六年間である。もちろん当時の歌壇とはかかわりのなかつた時代である。

第二期は、宝永六（一七〇九）年の上京後、梅月の手引きによって実陰の門に入り、やがてそこを辞去する享保六（一七二一）年の夏のころまでの約十二年間である。年齢からいえば三十七歳から四十九歳までの、歌道修行に専念していた時代で、歌人としての地位もほぼこのころに確立した。

第三期は、武者小路家を辞して自由の身となり、ひたすら西行を思慕してその多くを一所不住の行脚と各所の草庵生活に過ごし、宝暦三（一七五三）年七月八日、八十一歳で河内国躰尾（つくのお）の素封家北村六右衛門の常楽庵でその生

涯を終えるまでの三十余年間である。さきの第二期を歌人としての修行の時代とすれば、第三期はその完成の時代ともいえよう。「今西行」と謳われ、今に残る作物の大半はこの期の所産である。

ところで、似雲の当時の歌壇とのかかわりは、第一期は前述のとおり交渉のなかった時代であり、最後の第三期は世を避けてみずからの日々を味わい楽しんだ時代で、交際の範囲もごく限られた身近な人びとであった。したがって歌道修行の時代である第二期が、世を捨てながらも歌のためには世間との交わりを多くもって、周囲から多くを学んだ時代である。とくに堂上歌壇の重鎮であった実陰を、永きにわたって師としてその教えを受けることができ、その門弟、あるいは堂上各家の人びとも接する機会に恵まれ、時代の動きにもそれなりに通じ、その和歌観の基本が確立した時代である。そこで以下、この第二期を中心にして当代歌壇の概況を述べて、似雲がいかなる時代に息づいていたかをまずは考察してみる。

似雲が京に在った宝永・正徳・享保の十八世紀初頭は、元禄につづく時代で江戸期を通じて最も文運の盛んな時代であった。しかし、当時の歌壇の状況は必ずしもそのようではなく、他の諸文芸に比して遅れをとっていたことは否めない。とくに当時の京は、いわゆる堂上派、主として二条家の流れをくむものが大勢を占めていた。一方、当時の新しい機運に促されてその中で自己改造の動きがあったことは当然であろうが、中世の伝統的な保守の風潮は重く京歌壇を覆っていたと思われる。

これを少しさかのぼってみる。前代から江戸期への橋渡しをした人は細川幽斎である。幽斎は三条西実隆に学び、その孫家枝から古今の伝授を受けて二条家の歌学を大成し、当時の歌壇における唯一の指導者であったことは、後陽成院が勅して丹後の田辺城から幽斎を救出せしめられたことによって明らかである。その門下に皇族では後陽成院の皇弟

八条宮智仁親王、堂上では実枝の孫実条、中院通勝、鳥丸光広、地下では松永貞徳などがあり、いずれもこの道において名のある人びとである。堂上では幽斎からの教えを伝えて、二条派の歌学は堂上歌壇の中軸をなしていた。一方、皇室においては斯道に秀でた方がたが次いで出て、大いにその興隆を授けられた。かの幽斎が田辺城で、三条西実条、中院通勝、鳥丸光広の三人に古今の伝授をなしたのも、後陽成院のお計らいによって、その道統を保持することができたわけである。

また、後陽成院の皇子後水尾院はまれにみる優れた資性を承けられ、御集『鷗巢集』があり、詠歌についての抄物もおありになる。また、二十一代集や諸家の集から類題の詠一万二千余首を収集せしめて『類題和歌集』三十一巻を撰ばしめられた。その後、これにならってその皇子靈元院の『新類題和歌集』ができ、なお、民間の類書はほとんどこれにならっているのを見ても、そのお力に負うところの多いことを知る。また靈元院はあとに引く『翁草』によっても知られるように、みずからこの道の先達として歌壇を率いられた。

このように上に、また堂上家によき指導者を得たことは見のがせないことである。その指導者の一人が似雲の師武者小路実陰であった。『翁草』巻之十には次のようにある。

この君（注＝靈元院）敷島の道にたけ給ふ事、代々の帝にたぐふべくも非ず。上にかゝる君ませば、おのづから時を得て、此の御代には名にしおふ武者小路実陰卿、中院通躬卿、西三条公福卿、鳥丸光栄卿、冷泉為久卿、其の余の歌匠数多おはして、和歌の風体いにしへに恥ぢず、偏にもろこし盛唐の代に似たり。中にも実陰卿は、和歌の徳によりて、家にもあらぬ儀同三司の推任を蒙り給ふ。君の仰せにも、実陰は逍遙院このかたの歌詠みなりと賛めさせ給ひ、彼の卿は又君を其の世の聖とたふとみ給ふ。されば絶えて久しき撰集の御沙汰も有りぬれども、女房の歌なしとて、其の事止みぬとぞ。嗚呼惜哉。

逍遙院とはさきにあげた三条西実隆である。細川幽齋の師実枝の祖父にあたる。歌学に通暁し識見も高く、その詠歌にもすぐれたものがあったことは当流の抄物などにも明らかである。その子の公衆、孫の実枝、この三人を三条西三代として師範家の權威を誇り、また斯界の指導的な立場を保持してきたのである。実陰はこの血筋を引く。

また実陰に対する評価は、似雲がその言説を聞き書きした『磯の波』（『詞林拾葉』の一部で、享和元△△△年刊。）の、請われて認めた本居宣長の跋文によっても伺い知ることができる。引用の表記は私に改めた。

（前略）一わたりひらきて見もて行く中に、げにと覚ゆるふしぐ多くなむ見えける。そもく三百年ばかりこなたの人々の歌の中には、この儀同の君（注△実陰）ぞ秀れたまひて、近き世のわろき癖すくなく、ことばつづき、一歌の姿などもいにしへに近く、清らになむ聞ゆれば、この近き世にはこの君こそと年ごろも思ひわたるを、今この冊子を見れば、つねに教へ子どもに語りて導き給へりけむすじもいと正しくよろしきに、かゝればこそはと思ひあはせられてめでたくなむ。（以下略）

ところで、似雲の思想なり歌道の識見、あるいは詠風などを考えるにあたっては、この京歌壇の中心的存在であり、かつその唯一の師であった実陰の説くところを明らかにすれば足りるので、次に実陰の説くところをまずは概観してみたい。

実陰の歌学説は、彼が死去した元文三（七三六）年のところに、「童蒙のたよりと、諸抄物に載せたる事どもを、思ひよりしまま、書きとめ侍るものなり……」と奥にいう『初学考鑑』や、似雲が正徳三（七三三）年から享保六（七三三）年までの間にその言説を聞き書きした『詞林拾葉』などによって、その概要を知ることができる。

実陰の歌学説の特色としてまず第一にあげるべきものは、歌道の世界は宗教のそれと究極において同一のものである

としたことである。宗教が人生の根本問題なら歌道もまた人生の真剣な問題でなければならぬ。したがって、歌道は遊戯でもなければ、閑人の慰めごとでもないはずである。こうした考え方が実陰の根本にあった。これは聞き手である似雲が出家者であったからというのではない。以下、『詞林拾葉』（『日本歌学大系』巻六所収）によってその声を聞く。

東照権現十七ヶ条に、和歌は綺語たりといへども是をすつべからずとあり。是より外に和歌を綺語といひしことひとつあり。それより外になし。仏の説き給ひし御経も禪家より綺語といへることあり。さにはあらず、和歌の本意は誠意のみ。大学に誠意の終りは治国平天下の道にあらずや、意を誠にするは和歌にすぎたるなし。とくとかんがふれば、儒釈神道も皆歌道にこもれり。しかれども歌よむ人もなぐさみぎげいのやうにおもへり。きのどくなることなり。（中略）和歌の道理をとくと合点すれば仏道もさとらるゝなり。

また、

此の中、法然上人の法語を見しに、有がたきことあり。ある人上人に向ひてとひけるは、「歌よみ候こと後世の為にはいかゞ」ととひければ、上人、「歌よみ候事つみにもなり候、功德にもなり候」とこたへられたり。有難き事なり。此語をよみ、覚えず其まゝ涙し候。よみやうにて邪正あり、とくと心得らるべし。

和歌の本意は誠意であり、意を誠にすることによって、歌道の本旨に徹することができ、それが得道に通ずるものであるとした。実陰の場合、かく宗教と結びつけて歌道を説くことは、単に歌道を神秘化しようとしたのではなく、人間はまず「真実に心がけ」なければならず、「実情を先とし」「毫厘も私あ」ることのないように「たゞ内のやしなひ」に努めるようにすることが先決問題であり、歌はその上に詠まれるものとした。当然、仏道の悟りと合致するものとなり、宗教と結びつくこととなったのである。似雲は『詞林拾葉』の冒頭に、実陰の「随分真実に歌は心がけよむべし。真実に心がけ修行すれば、禅宗に頓悟あるやうに、一時にあかりへ出たるやうにこゝろひらくることあるべし」という

ことばを掲げ、またその終わり近くには、

歌はたゞ心をならふなりとあれば、めい／＼の心中をなほしたゞしもせで、よきことをよまうとすることは、さて  
く大きなあやまりなり。心を直さずしてよきことの出づき道なし。

と師から聞いたところを記している。これらによって実陰の歌道に対する考え方の根本が、心を重視することになったことがわかる。詞よりも心を重くみたのである。「うちさへと／＼のへば、詞は少々つたなくとも歌なり」といい、ある者の歌を評して、「詞はつたなければも実情にて一首調へり」ともいっている。実陰が二条派の流れを汲みながら心を重んじていることは、中世の冷泉派の主張に近いものを持っていたといえよう。

右の所説に関連して、さらに実陰の説く心の問題について考えてみる。心を誠にする、真実に心がけること、実情を先にする、そうして心の内のやしないに努める。そのためには心の和平が第一であると説く。『詞林拾葉』に、

此の和歌は和平をすなはち和歌とす。随分氣象を和平にもたるべし。和平ならではなりがたきことなり。(中略)  
和国は和平の氣象第一にかなはねば和歌は詠じがたし。随分和平に氣をもたるべし。順徳院、禁秘抄にも好色の道も又すておくべからずとあり。此の事を故西三条(注||実教)感心いたされしなり。和平のことなり。隱者色を好み申されよといふにはあらず。西行などは塵俗をはなれ切りたる人なれども、しつぽりとした恋のうたなどよくよめり。是はみな和平より詠じ出せるなり。

また同書に、

心二つなきとはいへども、歌よむには今日の俗情世智とは一向に場所ちがひたるものなり。皆人それにてすぐによまんとするゆゑによめぬなり。よみいだしてもそのすがたはなほだいやしきなり。とかく歌は優美至極のものなれ

ば、心をどやかにおとなしく閑雅にもたずしてはよまれぬなり。

この「のどやかにおとなしく閑雅に」というのは前の「和平」である。つまり、「俗情世智」に対するものである。「俗情世智」は和平の心を破るものであるから、「俗情ありてはよまれぬ」し、「俗情をさるべし」ということになる。

ところでこの「俗情」とは何か。同じく『詞林拾葉』に、

利口だて、何ごとによらずよろしからず。利口だては皆俗情なり。

とある。つまり銜気である。銜気は私意であり、私意はこれを邪とする。

とかく心の平かになるやうに、心まで養ふべし。その平かになる様は、かしこだて私意をのぞき、随分おろかにすなほになるやうにせらるべし。おろかにもちなせば、自然と平かなるものなりとて、うっかりとしたることにあらず。私智をさりて、又、正理をばまなこをつけ、見はづさぬやうに心得べし。

という。俗情である利口だて、かしこだて、私意を除くことによつて誠の意のはたらきを見ることができるとするのである。

題詠などにおいてはとくにこの心が必要であるという。

歌の席につきて、大かたの人まづいでやかさむと用意あり。大きにあしき事なり。いかにも念なく無心体になるべし。心は明鏡のごとし。それに用意すれば鏡に塵をためて色象をうつすに似たり。何にても題の意さはりなくうつらず。たゞ無心無我にして題をとりよむべし。

また、

畢竟とくと合点いたし候へば、屈託いたすことには無之候。題といふものは、心中に一切の物具足いたしたるものなれば、題にて心中のものをよびいだすばかりにて候。しかるによまぬうちより、きくとそのまゝ新意をおこし

屈託いたし、題をひきかぶりやうくとよみ候ゆゑ、すなほに出来不申候。

題詠は、すべて過去の内的経験、具足せる一切の内部的なものを、和平の心の状態で再現することであると見た。つまり「孺子の井に陥らんとするを見てたすくるに、いかなる心をもってたすくべきや。名利の為又思慮分別もはなれ、物と実と一つになりてながめば、自然ととのふなり」という、我と物とが一体になる、そこに眞の歌が生まれるとしたのである。

このように、俗情である利口だて、かしこだてを除いて無心無我でよまれる歌はどのような歌になるか。実際はこれを「無味」ということばで表している。それは上手の絵がすらりとして事少なく、その淡泊な中にいしれぬ余情があるのと同じで、中院通茂の「探幽などの画は、筆すくなくして余情かぎりなし。歌も又かくのごとし」のことばを引いて「無味」の実体を説明している。「空の美」ともいうべきものであろうか。またよい歌を上手の料理人の、軽くきれいな吸い物の淡味にもたとえている。

要するに、実陰の歌学説の一端ではあったが、歌道と宗教とは究極において同一の世界を共有するものであることを根本思想として、それに意を誠にすること、それには和平の心を養い、利口だて、かしこだてなどの俗情を排し、自他一体となって無心無我の心で歌をよむべきことを説いたのである。かくて余情ある無味の歌ができあがるということになる。

次に歌に詠まれるべき「実情」について実陰の述べるところを見る。やはり『詞林拾葉』に、

人、人情なきことなし。男女恋慕のことのみにあらず、恋の情が歌の本なり。仏を願ひ又花をまち入方の月をしたひ、かへる雁の名ごりををしむと、皆是恋の実情なり。又情なければ歌なし。しからばさてくさとりたる人は恋

の情なきかとおもへば、却て心明らかなるゆゑに、いにしへよりれきくの智者道者に恋の歌の秀逸あり。無情に  
いたらんくとして今日の人情を無理にさくも却て修行ていの場なり。至極にいたらば更に障あるべからず。

男女恋愛思慕の情は本より、いわゆる広義に積かれた一切の恋情、思慕の实情は詩歌發生の根元である。菩提を欣求する心も、月花に憧れ、人を恨む心も、鳥の声をあわれみ、帰雁を悲しむ心も、皆これ広義の恋情である。このように一切のものに対する恋情こそ、詩歌を生み出す根源であつて、詩歌はそこから發生すると説く。また、

歌はたゞよまうくとばかり思うてはならぬなり。ただ内のやしなひなり。そなたなどのよまれぬといふこと、け  
んたいひげの心なき故なり。ものごととおもふやうになれば、よむとなし心にはなほこと色々ある故に、その間よ  
り出でたるなり。

これは前のことと同じ趣旨のことを繰り返したにすぎない。

さらに、實際は一步進めて心の養い、すなわち洗練された情の必要を説いた。人には情、すなわち上述の恋情のごと  
きがあるからといって、それがただちに歌になるものではない。まただれにでもすぐよめるものでもない。そこに心の  
養いが必要となる。實際はこの心の養いを繰り返し、まず实情に立ち返れ、実にそめよと強調する。それが心の養  
いの対象である。いかなる場合にも常に実情実感の中軸として詠ずることが大切であるが、題詠急作の場合にはこの心  
の養いがとくに必要となる。实情に立ち返れ、実にそめよとは、言い換えれば、過去の内的な経験の喚起、生々しい感  
情の再現ということにもなる。これについて、

そなたなども随分常住に心をそまずにゐるとおもはるべきなれども、まだ実にそまぬなり。此方も片時も歌より外  
に心をおかぬやうに思へども、はなれてをる証拠を、此中、急作の歌ありて心なくしりたるなり。そなたなどもと  
かくにやしなひやうあしきなり。实情になりかへり俗にまじはりながら心をゆるやかにもち、優美にやしなひたる

がよきなり。みるものきくものにつけて俗事も詠ずれども、それともに詠ずる心は、世智俗情とははなれたる場なり。この味はひをとくと工夫いたさるべし。かく申す此方もゆかぬなり。

と述べている。心をゆるやかに、和平にたもって、いわゆる意の誠がのびのびと自由に活動できるように訓練しておくことである。

要するに、広義の恋愛思慕の情、それが歌の親である。これこそ真の実情というべきもの、理屈を抜きにした純真で、もっとも自然なものである。しかしそれらが、われわれの生活のすべてではない。われわれは生活にならされて、気づくべきはずのものにも気づかずにいることが多い。驚くべきはずのものにも驚かないでいることが多い。だから、この眠れる心を覚ますように心がけなければならない。実陰のいう実情に立ち返れ、実にそめよとはこのことなのである。このことを兩人の対話によってなお明瞭にしておきたい。

或律僧申候は、「其元歌すかれ候もよく候へども、隠遁者にて恋歌などよまれ候事、境界不相応に存するなり。」

「愚、恋の歌よむことさらに心の戒にならず。いづれも則持戒の心なり。いかにとなれば恋歌に一首として安心なることなし。あるひは玉の緒よたえなばたえねなどいひ、涙に袖も朽つるなど、又はおもひのけぶりに胸のこがるゝなど、皆難儀なる事なり。仏法に地獄を説きて浄土をすゝめ、悪をいひて善に導くがごときか。恋慕愛着の心あればかくの如く心をくるしむるものなりと恋の歌をよめば、存する故、おのづからよくいましめとなるなり」といひければ、かの僧、「尤」と感心いたし候。「此趣いかゞ。」「なるほど尤に候へども、恋歌の事、段々に様子ある事なれども、それよりかくのごとくたへられ候がよく候。尤いましめの法といふ説、尤すこしはあることも候が、しかれども直に一心の実より出る情なれば、弥陀を念じ候も、君臣父子夫婦兄弟朋友のまじはりも、しなかはりたるやうなれども、皆実情おもむけは同じことなり。その実情恋によむ心なり。古への恋歌たかきうたよき歌になし。

玉葉などの恋歌ことの外しだるく聞きにくし。是よろしからず。恋歌の姪風はよむことにあらず、実情をよむべし。姪風はおもくしたるく、実情は淡薄にて余情あるものなり。」

以上で実陰の歌学説を、主として「心」の問題を中心にして述べた。その中には近世の「まこと」の歌論にかやうものがあつた、後の歌学に及ぼした影響などについては別に考えたい。

なおまた、実陰は「そなたには何とぞ正風体をとくとしらせたく存ずるなり。」という。この「正風体」は『初学考鑑』によれば、定家から為家・為氏につがれ、さらに為世から頼阿に伝えられたものであるという。『詞林拾葉』に、「二条家の流は一首は何のめづらしきこともなく、たゞわづかに一字二字にて、あたらしくよみなすなり。」といっているが、「何となく詞やすらかに」「何のめづらしきこともな」いのが、二条家の正風体のようにとれる。先に述べた「無味の味」をもつたものともいえるが、似雲にはその実態は把握しにくいものであつたようだ。『詞林拾葉』には「思案すべし」とか、「沈吟」「工夫」「観念」「領解」などのことばを用いて自得すべきことを、実陰は繰り返し説いている。そして、

数年いろく／＼と仰せられ候へども、毎度御尤と感心はいたしながら、此方に、是は目あく／＼と存ずることは御座なく候。

ということもあつた。

こうして永年にわたつて苦惱もしつつ指導を受けた似雲自身は、歌についてどう考えていたのだろうか。残念ながらそれを伺うことのできる、いわゆる歌論書・歌字書といったものは遺されてはいない。しかし、彼にはそれに代わる、

享保十八（七三）年、六十一歳の時に詠んだ「寄歌述懐百首」なる一卷が伝わっていて、これはまた、彼の歌文集である『としなみ草』巻第十四に収められている。歌人似雲としては他に類のない百首歌をもって歌論書・歌学書に代わるものを遺したいという強い意識があったのではないか。今はこれによってその和歌観を考察するしかない。「寄歌述懐百首」は、西行・似雲の墳墓のある大阪府南河内郡の弘川寺に蔵されている自筆本『としなみ草』のそれによった。また判読の便を考えて上下両句を一字空けて記載した。

○珍しき事をたくみにもとめなば あらぬ道にやさすらへなまし

○憂きことも嬉しき事もそのまゝに みな言の葉の種ならぬかは

○いつはりの罪とやらなむ心にも あらぬことばの花のかざりは

○かろからぬこゝろをうちのるあるじにて たゞ言のはゝやすらかにこそ

○見るたびに哀こそへよき歌は たゞ何となくやすらかにして

○心からたゞやすらかによむ歌は さはることばのよしあしもなし

○言の葉はたゞおさなくてをのづから ふかきいろかをいかでそへまし

珍しさ巧みさを求めず、憂きも悲しきも、すべて自然のままに、ただ何となくやすらかに、しかも幼く、あるがままなる人生相の表現を基本にして、心にもあらぬ言葉の花の飾りを邪としてこれを退けた。一切の技巧を排し、狭い主観にとらわれず、ただあるがままにみずからの道を進もうとするところに、「さはることばのよしあしもな」く、なんらのさしさわりもなかったのである。無技巧にして無理想、私意小知を排しておおどかに自然と合し、物と一体となる。そこに似雲の詠歌の姿勢があった。これこそさきの師実陰から学んだものである。これはまた、後の小沢芦庵らの歌学説の中心思想である「ただこと歌」に通うものでもある。この「寄歌述懐百首」の文化七（八〇）年刊のものに、松尾

崇順が序で、芦庵の説は早くも似雲によって開かれたものであるという意味のことを述べている。これを実陰の説が芦庵に影響を与えたのだという人もあるが、同じことである。

次に、宗教と歌道との一致については、師説と異なるところはなないが、似雲にあっては一種の信仰的な力とさえなっていたのである。

○こゝろからへだてけるかな今迄は 仏のみちとしき嶋の道

研鑽錬磨によって師の心を自得したわけである。歌道を生活とし仏道を生活とする似雲にとつては当然すぎるほど当然な帰結であつた。

実陰が歌道と仏道との一致を基調として誠意を説いたように、似雲もまた心の養いを根本とした。

○かたよらぬ心の糸にぬきとめて みがける玉や千々の言の葉

○つゝしめよなにはのことも読歌の 言葉のすゑや人のよしあし

○かへり見ようちの心の水かゞみ よしあしながらうつる言の葉

○ちりまがふ言葉の花やぬきとめむ こゝろの糸のみだれざりせば

○すなほなる心はおなじからうたも 思ひよこしまなしとこそきけ

○よき歌をよまむとすゝむ心あらば たゞかへりみよあしきところを

片よらぬ心、すなほなる心、みだれぬ心の糸、すなわち私意邪心を退けて、純心和平につく。そこにいわゆる実陰の、意を誠にするものとの一致点がある。似雲は自己の實際生活によって師説の裏づけをしたわけである。この心の養いは師説と同様に古歌によって一方の範を求めようとした。

○ねがはくは人のこゝろもあつき世の　むかしにかへれわかのうらなみ

○わけいりてこゝろをそめよ絶ずたゞ　むかしの人の言の葉草に

○今さらによむ歌よりも折にあへば　あはれぞふかきふるき言の葉

心の上に、形の上に、学ぶべきものは古人の素直な生活態度であった。古歌については實際が指示したようにもっぱら三代集、頓阿の『草庵集』、逍遙院の『雪玉集』などに中心のあったことはいうまでもない。また、西行の詠については似雲の性向・趣味・生活等の上から見て、とくに注意が向けられた。實際も西行については常に贊嘆の声を惜しまなかつた。

西行より以前も以後も歌上手あれども、西行のやうなる風骨一人も見およばず。西行はおもくいでたる歌なし。皆かろく出たるものなり。丸木立のきれいなるくずやのごとし。逍遙院なども上手にてありけれども、西行とは行かた違ひたる歌なり。

このように西行の風骨と歌風とを推賞したが、早くから西行を思慕していた似雲にとっては、師のこうした評価がどんなに彼を動かしたことであろう。西行への思慕は、こうした實際の指導によっていっそう高まったといえよう。『吾妻鑑』文治二（二二六）年八月十五日の条に、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮で西行は源頼朝に行き会い、そのおり頼朝は歌道と弓馬の事を尋ねたが、西行は「詠歌は、花月に対して動感するの折節、僅かに卅一字を作るばかりなり。全く奥旨を知らず。さればこれかれ報へ申さんと欲する所無し」と言ったその態度と抱負とは、似雲によってりっぱに具現されたといえよう。

かくのごとく古歌からまた古人から学ぶ所は極めて多かつたが、

○しきしまの道は一つのすぢながら　かはるすがたや代々の言の葉

というように、いつまでも旧い殻を守っていることのみが似雲の主義でもなかった。時代の推移とともに移り変わってきた歌の姿、それは今の世にも当然ありうることで、常にその移り変わりには目を注いでいたと思われる。

次に。似雲が心の養いについて、その戒律の目標としたのは、たくらみ心、自惚れ心、銜気などであった。

○世の人に見せもきかせもとばかりに おもへばよそのやまと言の葉

○われのみと思ひあがりてよむ人の 心やひきゝやまとことの葉

○難波津やあしき道にもいりぬべし わがことのはをよしとおもはゞ

○世の人をおどろかさんとおもふこそ わが身もしらぬ夢の言の葉

○一ふしとおもふころのなかくに いろ香もきゆる人のことの葉

これらはいずれもその師が諫めた所のものである。かかる理想の下に一途に進もうとしたが、しかしその道は決して坦々たるものではなかった。

○立かへり道やもとめむころのみ すゝ進むにまよふ大和言の葉

○くやくしくは思ひながらもこりずまに 幾度まよふしきしまの道

○へだてけるころよいかに身をすてゝ よるかひもなきわかかのうら波

嗟嘆・焦躁・苦慮、こうしたものが絶えず似雲を苦しめた。迷夢・苦惱・煩悶、これらの冥い世界がいつも似雲を取り巻いた。しかし、開明・了悟・愉悦等の明るい世界もまた常に隣り合っていた。迷えばこそ開かれる。限らない法悦に浸ることのできるのも、こうしたときであった。人生は絶えずこの二つの世界を進止出入して、いつか広い世界に出ることができるのである。冥い世界が長ければ長いだけ、明るい世界もまた長く続いた。しかし、それには、

○波風はよしへだつとも身をすてゝ わたりて見ばやしき嶋の道

○敷嶋の道より外は世中に もとめなき身を神も哀め

○はや瀬川のぼる小舟のつなでなは たゆめばくだる大和言の葉

といった和歌に対する飽くなき執念、それに厳しい自戒があつたのである。

要するに、似雲の後半生は師説の具現またはその生活化にあつたといつてよく、その具現、生活化のためにはついに前述のように師の門を辞して、一所不住の草庵と旅の生活を選ばせることとなつたのである。